

■ 乾癬性関節炎における体軸関節病変の検討

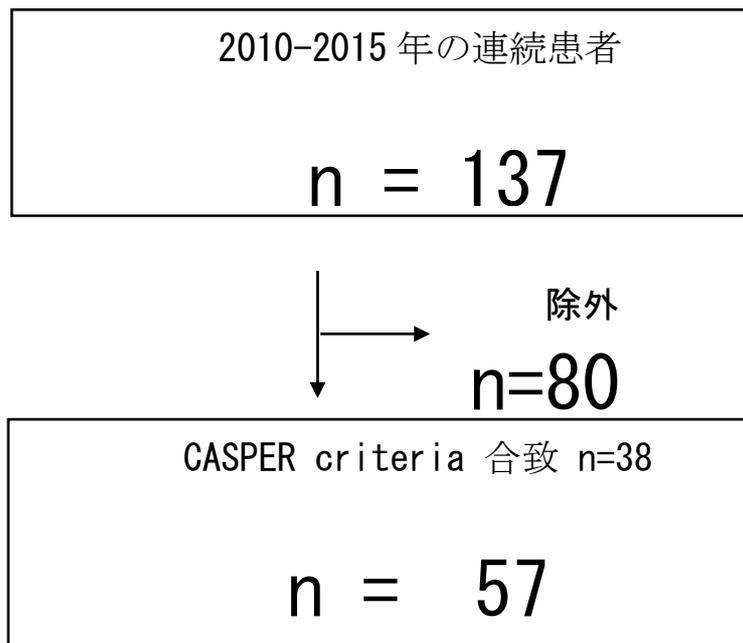
森田明理（名古屋市立大学大学院医学研究科 加齢・環境皮膚科学）

研究要旨

乾癬は関節炎を併発することも少なくなく、約 10%程度と言われ、乾癬皮疹があることが、関節炎を併発するリスクを伴う。本邦における乾癬性関節炎 (PsA) の有病率はおよそ 10%とされる。欧米において、PsA 患者における体軸関節病変の頻度は 5-28%と報告がある。また、体軸関節病変における頸椎病変の頻度はおよそ 35-75%といわれているが、アジア人での体軸関節炎の有病率や関連する因子の検討は過去になく、その頻度は不明である。本邦における頻度も不明である。我々は 2010 年から 2015 年に名古屋市立大学病院皮膚科にて PsA と診断された患者について、体軸病変について評価した。

研究方法

対象患者は下記の基準に基づき選定した。1)CASPER criteria を満たす者、2)Biologics の使用の有る者、3)炎症性腰痛の存在など体軸関節病変が疑われる者の三項目である。脊椎病変の有無は単純レントゲン写真にて ASAS recommendation と NewYork criteria に基づき評価した。一施設の後方視観察研究である。2010 年 1 月～2015 年 11 月に名古屋市立大学病院皮膚科を受診した PsA 患者を対象とし、乾癬性末梢関節炎・体軸関節炎の疑いのある者に頸椎・腰椎・仙腸関節の単純写真を撮影し、所見の有無を評価した。解析対象患者は 38 名であった（1次解析）。



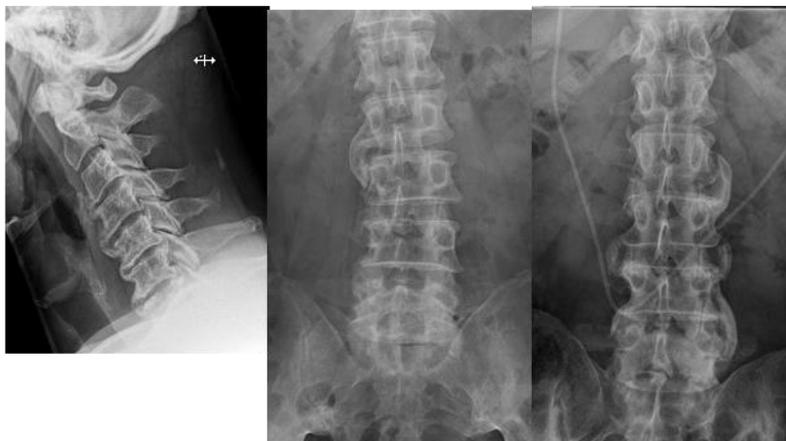
研究結果

19人(50%)の患者に頸椎病変を、24人(63.2%)に腰椎病変をみとめ、仙腸関節では右に28人(73.7%)で左に29人(76.3%)で病変みとめた。頸椎病変の有無は血清CRP値と相関をみとめた(Spearman's rank correlation coefficient: correlation coefficient=0.583, $p < 0.01$)。また、全体の17人(44.7%)にびまん性特発性骨増殖症(DISH)に類似するbridging osteoproliferationsをみとめた。DISH様の骨増殖のリスクとなる因子は同定できなかった。今回の検討より、炎症性腰痛をみとめる患者における頸椎病変の頻度は欧米と同様に高いことがわかり、特にCRPが高値である患者において慎重に経過をみる必要があると思われた。また、DISH様の骨増殖はPsAや変形性関節症(OA)と時に判別が困難なことがあり、同一スペクトラム上の疾患である可能性があるため、今後も検討が必要である。

頸椎病変の有無に影響を与える因子のロジスティック多重回帰分析

背景因子	Odds ratio (95% CI)	P value
罹患年数, 年	0.32 (0.05-1.93)	0.215
男性	1.28 (0.20-7.94)	0.793
年齢 >50	0.83 (0.14-4.84)	0.837
爪病変	1.87 (0.30-11.0)	0.506
頭部病変	0.28 (0.01-7.68)	0.453
仙腸関節炎 grade 3 or 4	1.72 (0.27-11.17)	0.568
BMI > 24	3.71(0.52-26.39)	0.190
シクロスポリン	10.8 (1.2-94.22)	0.030**
エトレチナート	0.39(0.03-5.32)	0.483
PUVAバス	23.1 (1.30-353.45)	0.024*
NBUVB	0.66 (0.56-7.69)	0.737

Bridging osteoproliferation (DISHに類似)



DISH : Diffuse idiopathic skeletal hyperkeratosis

考察

日本においても欧米と同様に体軸関節病変をみとめる可能性があり、症状がなくても頚椎を含む体軸関節に所見があった。異常所見の中には変形性関節症やDISHも含まれるが、PsAにおけるDISH合併の報告は過去にある。頚椎病変の中には致命的なものもあり、定期的な体軸関節評価が必要である。血清反応陰性脊椎関節炎の早期スクリーニングにMRI非造影STIR像が有用とされており、また、関節エコーの簡便性・有用性も期待される。

本研究はレントゲン写真の所見の有無を純粹に評価した。脊椎関節炎と変形性関節症、および両者を完全に区別し難いDISH様の所見が混在しており、それらは同スペクトラムの疾患である可能性があるため、さらなる詳細な評価・検討が必要であり、現在、解析対象者をふやし、検討を進めている。